

## 弁証法の起源

永 島 輝 雄

### 序

弁証法とは何かを考究するに際して、思惟法則の基本である形式論理との対比から弁証法の定義を始めることは、哲学者の常套手段であるので、私もこの手法によって弁証法の本質を探究することにした。

というのは弁証法といえども人間の思惟を離れては成立しないものである以上、形式論理を全く否定する立場から弁証法の定義を始めれば、弁証法のもつ学問の性格そのものを否定することにもなり兼ねない。学問としての弁証法を定義しようとするならば、形式論理と同一基盤に立ちながら、それとは別な一つの論理を探究することになる。

弁証法とは形式論理を否定する「非論理」的性格をもつものなのか、それとも形式を否定し内容に基づいて世界を考察するならば、世界は形式論理とは相違する特別な論理が必要になるということなのかである。弁証法を形式論理と対比してその特色を闡明しようとするれば、形式論理が除外した非形式の領域に、一つの特別な論理が支配するのを示唆することになる。これは思惟法則としての形式論理に対して、

存在法則としての弁証法を明示している。

このように単なる思惟法則としてでなく、世界法則、歴史法則、存在法則として弁証法を定義すれば、弁証法は当然、超思惟的なもの、非論理的なものに関係することになる。しかし、弁証法を超論理、非論理と規定することは是認されない。弁証法が存在法則に関係するとしても、やはり弁証法は一つの思惟法則の一環として把握されなければならない。思惟法則の網の目に捕捉されないものは、考えることもましてや学問的論理になることも全く有り得ないからである。

弁証法的思惟のもつ危険性は実はここにある。存在法則に関係なく、思惟が一人歩きする危険性である。真理を生産し世界を創造する觀念弁証法は、このよい実例である。人間は傲慢、不遜にも、思惟弁証法によって世界の王者、宇宙の支配者であるという一つの哲学的解釈に、自己の存在理由を求めている。更にこの解釈だけに満足しないで、真理生産者として欲望のまゝに社会を改革し、世界を改造しようとする唯物弁証法を発生させている。

そこで西洋哲学の源流である古代にさかのぼって、弁証法発生の由

来を探究してみることにする。弁証法の元祖が誰であるかは哲学者によって相違するが、一応、ゼノンとヘラクレイトスにその起源を求めている。そこで本論文も形式論理と弁証法の対比から出発して、パルメニデス、ゼノン、ヘラクレイトスの三人の哲学者を比較検討し、そこに古代弁証法の意義を考究することにした。

## 一、形式論理

形式論理では同一律が基本であり、他の思惟法則、すなわち矛盾律、排中律もそこから派生してくる。学問もこの同一性なしには成立しない。そこで学問成立の為此はこの同一律を解明しなければならない。同一律とは「AはAである」で表現されるけれども、これは決して無意味な同語反復ではない。

例えば「私は私である」においては、変化しない自己同一性を人格性、意識の統一性として表現する。私はあなたにならないのであり、そこでは移行、変化が否定されている。「私」は固定、静止してあり、哲学的には本質的同一、実体的同一とも規定できる。

本質が同一であれば、当然、属性も同一であると推理する。日本の犬もアメリカの犬も同じ犬であることによって同じ姿、形をしているはずであり、たとえ場所が変化していても同質性、共通性において同一であると判断する。以上二つの分類を整理すれば、前者を時間的同一、後者は空間的同一と規定できる。つまり私は時間が経過しても私であり、又、私も「ひと」であれば、あなたと私は「ひと」において

同一であることによって、「ひと」の属性も同一であることになる。

このことは日常的経験において確認できる同一性である。この基礎の上に学問的同一性が成立する。人間の考えることはすべて同一であるという思惟の普遍性、同一性である。人間とは理性、精神、魂であり、そこから流出する思惟は普遍的であるから、思惟と存在とは同一であるという観念論が発生してくる。観念論においては、思惟と存在は同一でなければならぬという思惟の要求が真理である。これに対して、思惟と存在の一致が真理の基準であるという考え方は一般論として首肯できるが、現実には即して考えれば両者は同一であるはずもないし、又、あつてはならないという實在論の立場がこれに対抗して現われる。

世界はロゴス、法則、原理によって動くのであり、これは人間の認識範疇とは別なものである。従つてそれは存在的、法則的同一性といふことができる。この同一性は特に科学の真理として適用できる領域である。科学は現象面における属性の同一を前提としており、帰納的に法則的同一性は実証できるものとされている。

これに対して哲学は実体的、本質的同一性を要請し、思惟と存在の一致を要求する。たとえ属性に変化、生成があつても、実体、本質として同一でなければならぬ。もしこれを否定すれば、人間生活そのものの根底を破壊することになる。人間生活は単なる科学生活で満足できるものでなく、科学生活の基礎に価値観をもつものである。この価値が哲学的要求となつて思惟と存在の同一を要請する。

以上で四つの同一性の意味について論じてきたが、結局、思惟と存在の一致、法則と存在の一致が認識論における真理の基準であり、これによって同一性が真理となる。この真理に違反するものは不一致としての虚偽であり、これを思惟法則によって規定すれば、同一律に違反するもの、すなわち矛盾律、排中律である。矛盾律で問われているのは矛盾の意義である。排中律では中の意義が問われている。そこで矛盾の定義から始めたい。同一律に違反するものは矛盾であるから、矛盾と「AはAである」と同時に、「AはAでない」ということがある。真理はどちらかにあるのに、どちらでもあるのは矛盾である。

真理がどちらかにあるということは、二つの主張が対立関係にあり、相互に否定し合っていることを前提している。すなわち対立する一方が真理であるためには、その他方を虚偽としなければならない。自己肯定のためには対立する他者を否定するのが絶対不可欠の条件となる。

思惟成立のためには対立、矛盾の否定が必要条件であるが、これは思惟領域においてであり、これをそのまま他の存在領域に移行させ、同一化の延長としての普遍性を主張するのは、思惟と存在の一致を要求したことになる。存在自体の徹底的観察が大切である。これによって看取されるのは存在の深みであり、対立、矛盾、否定関係という皮相的観察では表現できない存在の神秘である。これが学問領域を思惟形式よりも存在の内容にまで深めたいという弁証法的要求となる。

思惟形式によれば対立は相互絶対否定によって成立するが、果して世界は二者の絶対否定関係——闘争——によって動いているのか疑問

である。思惟形式をそのまま存在自体へ移行させることは極めて危険な考え方であり、又、実際にこの思惟形式を絶対普遍の真理と確信して、存在自体に対立闘争の原理を導入する思想家のあることも事実である。ゼノン、ヘラクレイトスに問われているのは実はこの視点である。

矛盾は否定されるべきであることは形式論理によって明示されている。思惟は必ず服従しなければならない同一律の規制をもつ。しかし、世界全体がこの視点によってすべて同一化され尽くすが問題点である。同一化できないものが否定すべき矛盾として攻撃の目標となるのであれば、観念論的思考に自ら陥っていることを立証したことになる。

観念論者の看過しているのは中の立場である。どちらでもあるというのは形式論理では矛盾とされるが、実はこれも中の擁立である。排中律では対立するもののどちらでもない第三者を中と定義している。

つまり対立する両極の中間に位置するものという意味である。思惟は移行し合わない両極だけを存在と認めるが、実際にはその中間的存在も認識できるのであり、これが種差による対立となっているのも事実なのである。そこでは、全く相反するもの、絶対否定すべきものの関係では同一化できない、別な領域の存在することを証明している。この領域は弁証法の取り扱う新しい問題領域となる。

ところで、ゼノン、ヘラクレイトスは、どちらでもあるという「中」に弁証法の意義を認めている。このように弁証法は矛盾律、排中律に違反することで、形式の枠外に存在する内容の多義性を主張したこと

になる。しかし弁証法といえども同一律に違反することはできない。内容の多義性からすれば、これを同一視すること自体、存在に則していない論理となる。これは学問の宿命として認めざるを得ないが、といって同一律を否定すれば、同一律を否定するという真理の主張それ自体が、同時に否定されるという自己矛盾に陥る。すなわち同一律の否定は真理の否定であり、真理を否定した主張を真理として容認できない。主張は必ず真理でなければならない。そこには主張の真理という形式で何らかの同一性、真理が論述されているはずである。

現象の対立、矛盾にもかかわらずその本質に同一性を洞察するのは、形式論理の常用手段である。逆に同一性の中に矛盾を看破すれば弁証法の発生となる。真理が矛盾を含むという主張は、弁証法自身矛盾を含むものであり、従って弁証法が絶対の真理として主張されていないことになる。弁証法自身が常に変化、生成すべきものである。そこでは世界が変化、生成するものであるという同一性の主張は、真理が変化、生成するものであることの是認となる。

弁証法にとっては静止が同一なのではなく、変化、生成が同一である。更に変化、生成に一定の法則を認め、相対的真理から絶対的真理への発展を看取すれば、それは近代弁証法へ自ら生成したことになる。そこでは正、反、合の発展形式によってすべての存在が変化、生成する、という同一性が哲学的前提となっている。しかも変化、生成を一定の発展過程と断定するこの同一化は、絶対的真理を基礎としている。変化の固定化によって近代弁証法は、形式論理と同一基盤に立つこと

になる。

統一体に矛盾を発見しこれを排除するのは矛盾律に即しており、又、妥協による共存を画策しない執拗な矛盾者の否定は排中律に適している。しかし近代弁証法に認められる変化の凝固化は論理の硬直化を意味する。真の弁証法は存在に即して柔軟に変化すべきもので、弁証法そのものを絶対の真理としてこれに固執したりすれば、自ら形式論理の術中に陥ることになる。

弁証法自身が変化、生成すべきもの、常に別の論理に脱皮すべきものである。自ら絶対の真理へ発展する過程にありながら、現在の論理を絶対の真理と錯誤する愚を犯してはならない。何よりもここで絶対の真理として前提されているのは、思惟と存在の一致である。自己の論理を存在との一致であると誤認するのは観念論特有の驕慢である。学問の成立にとって重大なことは、同一性の難点を充分に認識した上で、存在を真理の妥当限界まで同一化することにある。それは存在の神秘を認識したいという思惟の宿命でもある。

## 二、古代弁証法論理

形式論理の代表的古代哲学者としてパルメニデスを挙げることで、パルメニデスは同一律を忠実に遵守して、生成、変化を否定し「有は有るが、無は有らぬ」という。従って無から有を生ずることも、有が無になることもなく、有は有から生ずるという連続性が同一性の意味となる。そこでは、有るか有らぬかが矛盾律、排中律に則した真

理基準であり、非存在の存在は矛盾的存在として否定されてある。

パルメニデスによれば非存在の存在は形式論理に違反しているから、考えることも証明することもできないものである。しかし眼、耳、舌などの知覚によって非存在の存在が仮定できるとしている。光と闇、温と冷が知覚的事実として現われてくればこれに従わざるをえない。

「温きものは有るものの側に、他のものは有らぬものの側に配している」「全体は双方等しい光と目に見えぬ闇と同時に充たされている」。

パルメニデスは「より多いものが思想を決定する」と考えて、温が冷より、光が闇より多いものと規定している。知覚的事実が両者の混合であるから、思惟はどちらかに優越性を与えた知識でなければならぬ。パルメニデスの思惟は当然のこととして、「温きものによる思惟はより優れて、より純粋なもの」となる。

知覚できないものは思惟することはできない。「知覚と思惟とは同一である」とのパルメニデスの主張によって、非存在の存在は知覚も思惟もできないものとなる。更に目に見えない闇は思惟においても有らぬもの、とパルメニデスは規定する。しかしパルメニデスにとっては現実的に目に見えない闇がそこに知覚的に光より少なく存在するはずなのだが、思惟によって論理的に否定されている。知覚と思惟は同一であると形式的に定義しておきながら、その内実は知覚に対する思惟の優越である。

このことは、「思惟と存在は同一である」とパルメニデスが主張することにも、合致する。有らぬと論理的に考えられるものが存在的に

も有らないのだから、存在するか否かは人間の思惟によって決定される。そこに前提となっているのは、存在に対する思惟の優越、世界における論理の優位である。

この思想をパルメニデスの弟子ゼノンにも発見することができる。弁証法の発見者ゼノンにおける論証の矛先は運動の不可能に関するものである。その有名な論証が「飛んでいる矢は静止している」である。現実には飛んでいると知覚される矢が静止しているはずがないのに、これを静止していると論証するのは思惟領域においてである。しかも思惟を存在へ一致させるから、そこに矛盾が発生してくる。飛んでいると見える矢は実は静止しているのだと論証させるものは、運動否定の論理であり、この運動否定と運動肯定の対立、すなわち知覚と思惟の不一致が矛盾の内容となっている。

ここでゼノンによる運動否定の論理を検討してみることにする。飛んでいる矢は無限に分割した各瞬間には静止しているのであり、従って各瞬間に静止している矢を幾ら集めてもその矢は飛ぶことにはならない、とゼノンは論証する。形式論理学ではこれを合成の誤謬という。無限に分割したものを幾ら集めても有限には逆行しない。そこには無限と有限の移行不可能な境界がある。従って有限なものを無限に分割して考えることにも誤謬があるとしなければならない。

時間を無限に分割すれば瞬間になるが、空間を無限に分割すれば位置のみあって大きさのない点になる。点は大きさ、幅がないのだから、点を幾ら集めても線にはならないという論理である。完全な正三角形

を現実に図面化できないのに、思惟として正三角形の定理を作成する。このように現実に不可能なことも思惟としては可能となり、これが思弁としての学問を成立せしめている。

現実に飛んでいる矢を実験的に静止させることは映写による以外は不可能である。まして時間を無限に分割したり距離を無限に分割したりするのも、人間の実験能力を超えており全く想像、推測の領域である。もし無限の視点で把握する運動否定の理論を、そのまゝ存在へ移行、一致させればどうなるのだろうか。時間は静止して現在のみあり、空間は位置のみあって長さがなく、従って人間は目的地へ歩いて行くことがでなくなる。

現実には、人間は目的地へ歩いて行けるし、又、矢は目標物に向かって飛ぶことができる。そこで有限を無限化することも、無限を有限化することも同一の誤謬に属する。すなわち思惟と存在の一致に根本的誤謬がある。ゼノンの発見した矛盾は、思惟と存在の不一致にある。つまり頭の中で思考実験できることと、頭の外で観察できることを明確に識別しないで、それらを一致させることに矛盾が発生している。「矢は飛んでいる」と「矢は飛んでいない」とは相互に矛盾する命題である。形式的には確かに矛盾し合っているが、内容的に検討してみれば次元の相違に帰着する。現実に不可能な実験を別の次元で試行し、これを現実へ還元する誤謬が矛盾の内容的意味となる。このためにゼノンの運動否定の論理は、現実に不可能なことを可能なことのように虚構する詭弁として非難されている。

知覚の次元として、「矢は飛んでいる」と「矢は静止していない」とは形式上同一の真理である。思惟の次元として、「矢は飛んでいない」と「矢は静止している」とは形式上どちらも真理である。ゼノンの師パルメニデスの理論によって知覚と思惟とは同一であるがために「矢は飛んでいる」と「矢は静止している」の二つの命題が同時に真理とされてしまう。つまりゼノンは、各次元において形式上真理とされる命題が内容的には矛盾し合っていることを、論証したのである。

ゼノンの哲学的目標は運動が矛盾関係にあることの指摘でなく、運動の否定にある。それは矛盾命題のどちらかを真理とする形式論理に準拠している。従ってゼノンは真理が思惟にあつて知覚にないと論証しているのであるから、パルメニデスと同様に思惟の知覚に対する優位をゼノンにも認定することができる。

これに対してヘラクレイトスの思想は対立するもののどちらかに真理を承認するのではなく、対立闘争するもののどちらにも調和を認識する考え方である。そこでヘラクレイトスの矛盾概念から説明していきたい。「われわれは同じ河に入っていくのでもあり、入っていないのでもあり、存在するのでもあり、存在しないのでもあり」。この表現は形式論理に違反する矛盾肯定の理論である。これは真理がどちらにもあるという矛盾命題によって成立し、非論理的矛盾が世界の同一的現象であるという一つの論理によって構成されている。

しかしこの世界認識は形式論理における矛盾対立と全く同一である。そこに存在の多義性に関する認識はなく、余りに存在を二元論的に分

析し過ぎる解釈がある。この画一的な存在分析は存在自体の透徹した認識からでなく、矛盾対立という形式論理の觀念からのみ遂行されたと推論できる。矛盾対立は元来、思惟に属するものであるから、思弁論者としてヘラクレイトスも、世界は矛盾であるとの問題提起をしたものと考えられる。

パルメニデスの不変、不動の真理に対して、ヘラクレイトスは変化、生成、運動を世界の現象と認識する。哲学的思惟は固定、静止に同一性を求めても、変化、生成、運動にはそれが求められない。すなわち変化の多義性に思惟が満足できないのは、変化に一義的法則が把握されていないからである。法則の発見は変化の固定化である。又、哲学的思惟は流動的現象の根底に同一の本質を洞察することによって、本質と現象との連続性を同一化する。そこでは本質と現象の関係は固定化してしまう。

ヘラクレイトスも単なる変化、流動に同一化を認めたのでなく、それらの本質に固定化を求めたのである。これは思惟の要求であり、統一、調和の要請となる。ヘラクレイトスは対立するものの統一を証明している。「戦いは万物の父であり、万物の王である」。世界は戦い争う矛盾対立の現実であるが、神の法の力による調和によって世界が対立しながら一つであることが可能になる。世界に共通なものとしてあるロゴスが、世界の矛盾対立を統一にもたらし。ここでは神の法、ロゴスが不変不動の普遍的真理とされ、世界の非論理的性格にもかかわらず形式論理の中に思惟の要求を満足させるものである。

### 三、古代弁証法の特質

パルメニデス、ゼノンは変化、運動否定であり、ヘラクレイトスは変化、運動肯定である。両者の思想は矛盾対立しながら、思惟の存在に対する優位において一致している。但し、形式論理を尊重する方法が相違している。すなわちパルメニデス、ゼノンは同一律を現象化したのであり、ヘラクレイトスは矛盾律、排中律の否定を世界化したのである。現象、世界の解釈において形式論理がそれぞれ相違した形式で投視している。

同一律の現象化は現象を硬直化させ、存在の真実を見失っている。時間は初めも終りもない永遠の瞬間に固定したまゝであるし、空間も広さ、距離のない一点に固着して、移動、移行は否定されている。これに対して同一律否定の現象化は運動、生成、変化を肯定し、ある程度存在に則した解釈になっている。しかしこれは学問の非論理化であり、同一律否定による真理の否定となり、学問の本質を喪失する危険性をもっている。弁証法の特質は到底そこには求められない。

例えばヘラクレイトスが云うところの「海は最も清らかな水であると共に最も汚い水である」「存在するのであり、存在しないのでもある」という表現形式は、明瞭に矛盾であり非論理化である。それは思惟という同一次元での論理的矛盾を表示したものであり、明らかに一つの思惟形式を存在内容へ投視したものである。思惟と存在の一致がそこにある。しかし同一律に違反する真理の主張は変化、矛盾を単に

承認するだけのもので、これによって思惟の要求は満足するものではない。

変化、矛盾の指摘だけでは問題提起であって、その解決とはなっていない。思惟の要求とは実はこの問題解決への要請でもある。世界は変化するというだけの主張では学問とはならない。どのように変化しどのように生成するかという共通の法則が提示されれば、学問の資格としての同一性は満足されたことになる。矛盾においても矛盾の本質が同一性として探求されなければ、学問的要求を納得させたことにはならない。

ゼノンの思想は矛盾の発見であり、否定の論理の創造である。これは一つの問題提起であり、そこに現実と思惟の矛盾を解決しようとする意図は見当たらない。反対者の意見を矛盾に陥れることによって、かえって現実との矛盾が発生するのには極めて無頓着である。この点でヘラクレイトスは相反するものの調和を説いている。調和とは矛盾するものの統一、万物の一つであることを意味する。

矛盾するものの統一は同一律の最も承認しがたい命題である。従ってヘラクレイトスの統一思想は思惟の次元のものではなく、存在の次元に属するものである。「あらわな調和よりも、あらわでない調和の方が優れている」。思惟の次元にあればあらわな調和となるが、存在の次元にあればあらわでない調和となる。すべてのものが一つの神の法ロゴスから出ていることの認識はあらわでない。しかも「戦いは共通なものであり、常道は争い」なのであるから、そこに調和、和合を看

破するものもあらわでない。

ヘラクレイトスは「相反する道によって調和を保つ」として、上り道、下り道を規定している。上り道は万物が火から成立し火から生れる生成の過程であり、下り道は再び火に解体し火に化する転化の過程である。前者は戦いと争いの道であり、後者は和合と平和の道である。この過程は一定の週期をもって永遠に交替するという運命によって規定される。

相反するものの調和、矛盾するものの統一は同一律に違反する思想である。しかし存在を徹底して認識すれば、形式論理によっては把握できない非論理の領域が存在するのを理解するようになる。「人間的な本性は真の判断を持たない」。そこで存在の本質をどのようにも解釈できるのが人間の思想であるが、しかし人間の解釈には必ず普遍化、同一化がその基礎に存しなければ、これを学問として認めるわけにはいかない。世界は相反するものの闘争であるという解釈の根底にも統一の要求が働いている。

これは存在の思惟化、同一視である。しかしヘラクレイトスの調和は思惟による統一でなく、神の力によるものである。神の力は人間の思惟を超越しており、人間の思惟によって把握不可能な領域にあり、従って非論理的ともいえる。矛盾するものの統一、調和は、形式論理によっては理解不可能である。すなわち思惟と同じ次元で矛盾するものの統一を同一視しようとするから、それは非論理となる。

ここで区別しなければならないのは、思惟による統一と存在に見ら



れる統一である。人間には統一要求があるため存在に矛盾と統一を認識しようとするが、果して人間の要求する矛盾と統一が存在にあるだろうか。これは存在の神秘に属することであり、浅薄な思惟によって認識不可能なことである。ところが人間の統一要求によって思惟と存在の一致が哲学的要請となり、存在自体が思惟領域の中に挿入されてしまうことになる。

人間の軽薄な思惟によって存在に見られる矛盾を排除し、人間の技術力による統一を完成しようとする近代文明の萌芽が、既に思惟と存在の一致として古代西洋哲学に発見できる。ここでは思惟に属するものと、思惟に属さないものとの判断が大切である。思惟に属さないものとは論理の枠外にあるもの、超論理、非論理なものである。これは矛盾として排除されるべきものでない。人間はこれに改革の手を加えるべきでなく、服従するのみである。

矛盾、統一、調和は本来、思惟に属するものである。ゼノンの頭の中では飛んでいる矢は静止してある。矛盾の発生は思惟にある。ヘラクレイトスの矛盾解釈も余りに形式的であり、存在内容に則したものが看取できない。又、調和概念にしても神の力による統一であり、余りに宗教的、観念的である。先程の存在に見られる統一にしても、結局は思惟領域に挿入できるものに限定されている。そこには依然として思惟と存在の一致がある。

人間は思惟と存在の一致においてのみ、存在を了解する。従って思惟と存在の一致しないものを非論理、矛盾と断定し、そこに超論理的

なものの神秘性を認識しようとしなない。人間に理解できないものは虚偽、矛盾であるから切り捨てられるべきものとなる。ここで判別されるべきものは形式論理における矛盾と、思惟と存在の不一致による矛盾である。前者の矛盾概念は矛盾対当による弛緩のない対立を含む。この対立をそのまゝ後者の矛盾へと同一視することによって、存在が矛盾に満ちどちらかに切り捨てられるべき論理へと発展する。

矛盾の形式規定は確かに同一律によって完成している。しかし矛盾の発生は内容的に思惟と存在の不一致であることの認識が極めて重大である。そしてこの矛盾の発生が思惟的であることの把握は、弁証法の本質理解にあたつて重要なキーポイントとなってくる。つまり弁証法は本来、思惟に属するものか、それとも存在に則して思惟されるものか、という問題が古代弁証法において問われているからである。

ゼノンは思惟弁証法であり、ヘラクレイトスは存在弁証法であると一応区別できるが、ヘラクレイトスもやはり観念論的思惟形式から分離していない。しかしその矛盾統一の解釈に存在弁証法への萌芽を認めることができる。すなわち矛盾するものの統一に見られる非論理性のためである。それは一つの存在の解釈であつて思弁の解決ではない。ゼノン、ヘラクレイトスの弁証法に認められる共通点はこの解釈にある。思惟による積極的働きかけが未だない。ゼノンにはむしろ否定的思惟作用が認められるが、これは矛盾解決への機能ではない。

思惟の統一要求が存在に則する解決であるためには、思惟と存在の一致ではなく存在の法則化による同一視が求められる。むしろ理性、

思惟による哲學的解決より先きに、感覺、知覚による科學的解釋が望まれる。この基盤の上に思惟的統一を哲學的に形成することは、人間の採り得る最大限の良心的態度である。

#### 四、古代弁証法の歴史的役割

ゼノンの運動否定論はその内容に関してでなく、論証の方法について後世の哲學者に多大の影響を与えている。すなわち反對者の主張を矛盾に陥れる論争術はソクラテスに継承され、更に對話術としてプラトンによって完成している。彼らの弁証法とは対立する論争者によって眞実が創造される問答法のことである。そこには対立者の意見を矛盾に追い込む否定の論理と、眞理の発見へと導く肯定の論理が共同作用をしている。

ゼノンの論理には否定と矛盾の概念のみがある。しかし否定と矛盾によつて次の段階の肯定と統一が機能することになる。この意味でゼノンは弁証法の発見者となっている。この眞理創造の方法論としての弁証法を、ヘーゲル、マルクスが積極的に取り入れ、更に思惟と存在の一致によつて存在論にまで高め、近代弁証法の發展の基礎としたのは、哲學史上看過できない重大な哲學的功績である。

ゼノンの運動否定論も運動の中に矛盾を含むことの指摘であるから、生成、發展の論理を展開する近代弁証法にとつてこれも重要な内容的助言である。運動の起因がそれ自体に含まれる矛盾にあり、決して超越者による發動力ではない、という弁証法發展の基礎は確かにゼノン

に求められる。しかしゼノンの運動否定論が論拠とする無限分割論の積極的採用は余りない。後世の哲學者がこの無限分割論を否定すべく論議を継続しているのも歴史的事実である。<sup>(3)</sup>

運動否定の論理は形式論理によつており、AはAなりを忠実に瞬間の中で實現してみせただけのものである。つまりこれは逆に形式論理の矛盾摘発にもなっている。形式論理を忠実に實行すれば現実からこのように遊離してしまうことの實証でもある。そこで弁証法論理が現実に則したものとして要請されることになる。しかしゼノンは形式論理による運動否定を學問的目的としたのであり、これによつて形式論理の矛盾を暴露することになるとは全く予想外のことである。従つて後世の哲學者がゼノンを弁証法の元祖とするか否かは、その活用の方法によつて相違すると考えられる。

このことはヘラクレイトスにおいても同様である。戦い、争いを強調して万物の根源を火と仮定すれば唯物弁証法の元祖となるし、相反するものの調和、矛盾するものの統一を強調すれば觀念弁証法の大先駆けともなる。ヘラクレイトスの二面的解釋は、この統一づけるものが何であるかによつて生起している。

どちらの解釋を採るにしても共通なことは、対立するものの統一、調和である。「生と死、覺醒と睡眠、若年と老年は、いずれも同一のものとしてわれわれのうちにある。このものが転化してかのもとなり、かのものが転化してこのものとなるからだ」。これによれば対立するものにおいて相互転化が可能となる。相互転化とは近代弁証法の用

語では相互移行を意味している。

万物は火の交換物であり、火の転化したものである。火が燃えれば生であり、火が消えれば死となる。万物の根源は火であり、この火が対立するものの相互移行、生成を可能にする。火は争いを起し、燃え尽きれば平和となる。熱いものは冷たくなり、冷たいものは熱くなる。「しかし永遠に生きる火として、きまっただけ燃え、きまっただけ消える」のであれば、この「きまっただけ」を決定するものは何か。火の原理であるのか、それとも火以外のもの、非火であるのか。

生と死、存在と非存在の対立を火の状態によって説明するにあたって更に問題となるのは、この生成、移行を決定するものは何かである。唯物論者は火が決定し統一づけるという。それでは火の原理として法則化できるものがあるだろうか。更に火の変化による対立矛盾をどのように説明しようとするのか。矛盾し合うものに同質性、均質性を認めれば、それはもはや矛盾ではなくなる。何よりも相互移行、相互転化の承認は矛盾対立の解消である。

ヘラクレイトスの火による生成の解明は成程現実的である。しかしそれだけでは満足できない思惟の統一要求がある。これまで自然哲学者としてタレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスによる唯物的解釈がある。ヘラクレイトスもこの思想系譜に属しているが、弁証法論者として自然哲学とどのように区別されるのか。

ヘラクレイトスは火を運動する物として規定する。火は水になり土になる。この考え方が唯物弁証論に適応している。勿論、自然哲学者

の中にあつて、この思想は異質であり同時に奇怪でもある。弁証法が手品師のように、火を水にも土にもしてしまう技術と誤認されとすれば、正規の弁証法にとって不幸なことであるし、又、危険なことでもある。

このような表現がヘラクレイトスの文の随所に見受けられる。「土から水が生まれ、水から魂が生まれる」。この表現の意味は土は異質な水となり、水は異質な魂となるということである。ここで考慮しなければならぬのは存在の神秘性、物質における変化の深遠さである。形式論理では土は土であり水は水であるから、土は水になるという変化の神秘性は形式論理とは別な論理、弁証法を必要とする。これは手品師のように人間の手、頭によって相互転化を完成させるものではない。弁証法の危険性は手前勝手な思惟にあるのであり、人間の認識能力を超えた存在の運動にあるのではない。「眼や耳は悪しき証人である」としても、「何でも見たり聞いたり学んだり出来るもの」、これが私としては先ず尊重するものだ」とヘラクレイトスはいふ。

尊重すべきものは存在の運動であり物の変化である。矛盾し合うものの相互転化、相互移行は、思惟によっては理解できない非論理性を意味する。しかし存在領域におけるこの生成の事実を認識できるとすれば、思惟はこれを同一化し法則化する要求をもつことになる。AはAであり続けるのでなく、Aは非Aになるといふ非論理を論理化する一つの思惟法則が、生成の論理としての弁証法を結実させている。

非論理性の成立は思惟法則よりも存在法則として可能である。矛盾

は思惟によって排除されるが、存在として認識できる。そこで思惟はこの存在における矛盾的事実を超越したものとして排除すべきでないと考えるか、それとも存在の矛盾ですら思惟のそれと同様に排除すべきものと考えるかによって、二途の生成弁証法がここから分岐する。後者はヘーゲルとマルクス弁証法の途で、生成は矛盾を排除する運動となる。この運動を精神のものとすればヘーゲル弁証法となり、これを物質のものと考えればマルクス弁証法となる。

生成の弁証法としてヘラクレイトスは、ヘーゲルとマルクスに思想的関連をもっている。しかもどちらかと云えばヘラクレイトスは、戦いの弁証法としてマルクス弁証法に近似している。戦いは矛盾を排除する運動と解釈すれば、矛盾は発展の契機となつて弁証法が近代化される。そこまで拡大解釈される素地がヘラクレイトスにあることは確かである。しかしヘーゲルとの関連も無視できない。

火の原理はこれに対立する「非火」の原理を措定させるものである。火が火であり続けるなら存在に矛盾はなくなる。火が非火になり非火が火になるから矛盾が発生する。ヘラクレイトスの二面的解釈として火と非火の対立する二つの原理を挙げることができる。非火の原理とは神の法、ロゴスである。「万物はロゴスによって生成している」。

ロゴスさえ火へ移行して火の原理のみ強調するのであれば、火からロゴスへの移行を疎外したことになり、火と非火の対立矛盾は消失してしまふ。それは排他的解決であつて止揚の統一ではない。一つの原理に矛盾はない。二つの原理が否定し合うことによって矛盾が発生し

ている。この二つの原理が一つの原理から分裂すると考えればヘーゲルとマルクス理論となる。二つの原理の一方のみを存在として規定し他方を非存在として否定することによって、一方的統一を強行するのは形式論理である。弁証法に求められる課題は二つの原理の統一、調和をどこに指示するかにある。

## 五、形式論理と弁証法

世界を善の原理によって統一しようとした哲学者は古代において、ソクラテス、プラトン、アリストテレスである。彼らに共通しているのは善による悪の支配、抑制である。善のみ存在して悪は存在しないというより悪を存在せしめてはならないという否定の論理が前提されている。人間は善と悪の矛盾対立の関係の中であつて、どちらでもあるとか、どちらでもないとかいう中間的態度を採ることは道徳的にも容認されない。

常に人間がどちらかでないといけないのは、悪を非存在の存在として黙認しているからである。善に固執するのは非善を前提していることである。このように一元論は常に非一元論を前提して、二元論の立場を採らざるをえない。二元論を矛盾対立の場として解明し、その統一としてどちらかを選択決定するのが人間の自由意志であると解釈すれば、それは近代観念論の形式論理である。

いずれにしても形式論理においては悪は常に排除、否定されるべきもので、もし悪の存在を肯定することにでもなればこのために善は除

外されることになる。ここにおいて問われているのは悪の存在価値である。ヘラクレイトスは「病気は健康を、飢餓は飽食を、疲労は休息を快いもの、善いものにする」といつている。この思想の基本にあるのは対立するものの相互依存である。人間は悪によって善になるのであり、悪を除外して善になるのではない。

対立するものの一方を否定、排除することによって他方が肯定、保存されるという思想には、二つの異質な原理の容認があり、しかもこの両者の価値的優劣に基づく支配、服従の範疇がある。例えば魂と肉体、神と人間においては、劣者の存在を非存在化するためにその者のもつ原理を否定し優者の原理に服従させ、これによってかえって劣者の幸福な生き方が保証されるという、一元論による支配思想が認識される。

悪によって善になるという思想にも、善志向の価値観が基本となっている。目的は善であり悪はそのための手段に過ぎない。アリストテレスの形相と質料の関係にもこの考え方は活かされている。この点でプラトンよりアリストテレスの方がより現実的である。アリストテレスの人間解釈において質料なしの形相はあり得ない。質料と形相は分離しがたい統一を人間の中で形成している。但し質料の存在価値は形相の存在に有用である限りにおいて認められるに外ならない。

ところでヘラクレイトスにおいては悪によって善になるのは真理の半分であり、後の半分は形式論理を弁証法へと高める契機となっている。すなわち善によって悪になる帰路である。つまり善と悪の相互転

化、相互移行であり、これが世界の常道として決して一方的に固定化する発展の過程ではない。存在は変化、流動、生成するのみであり、そこに価値的発展する道程はない。このためにヘラクレイトスはゼノンの主観的弁証法に対して客観的弁証法と云われることになる。

しかし果たしてヘラクレイトスの弁証法を客観的といえるだろうか。ゼノンと比較すれば成程幾らか現実的な面もあるが、といって真実に存在に即する意味での客観性をそこに求めることはできない。ゼノンの思惟による矛盾追求に対して、ヘラクレイトスは世界の中に矛盾を発見している。問題はその発見の方法にある。相変らず形式論理の矛盾対立をそのまま存在へ投視している。形式論理の圏外で存在を認識する努力を怠り、存在は切り捨てられてある。

形式論理の欠陥は価値的統一のために、存在を一方的に切り捨てることにある。善のために悪が除外されている。客観的ということも存在に忠実に即するという意味で、そこに価値的排除、切り捨てを行ってはならない規制を包含する。思惟的統一要求のために存在するものを随意に価値序列化し、思惟的統一に違反するものを矛盾と決め込みこれを排除しようとする。この場合の矛盾とは思惟生産にあり、存在そのものの関与しないところである<sup>(4)</sup>。

飽くまで世界は矛盾して見えるのであり、世界を矛盾そのものと決定づける権限は人間にはない。形式論理の最大の欠陥はこの権限を疑うことなく当然のこととして強行するにある。思惟と存在の一致はこの権限の実現であり、何よりも存在に対する思惟の価値的優越を表現

している。この中心にあるものは人間主義である。人間の世界における優越を保証するのは思惟による統一解釈にある。これが西洋哲学史を古代から現代に至るまで貫流している基本的態度である。

弁証法的精神とは二つの原理のどちらかを人間中心に一方的に切り捨てないで、両者を活かし合う共存の論理を尊重することにある。この論理は形式論理からすれば非論理であるように見えるのであり、ヘラクレイトスはこれを調和と云っている。二つの原理は矛盾しているように見えながら存在的には調和している。実はこれすら人間には調和して見えるのであり、存在そのものは人間の浅薄な認識能力によって把握できない存在の深みをもっている。調和して見えるのも、矛盾するものの統一を求める思惟的要求に基づくものである。

存在認識において思惟の価値範疇から分離して存在自体に即する学問的態度は科学的である。法則的同一化を求める科学と同様に、哲学も存在の深遠に徹しなければならない。そのためには矛盾、統一、調和の概念を再検討する必要がある。そしてすべての弁証法的概念が思惟の価値的要求に基づくとの理解が、弁証法を形式論理の圏内へと引き戻すことになる。一元論的弁証法が観念論として唯物論として持てはやされるのも、精神は精神であり物は物であるとの同一律が承認されているからである。

ここでは二元論は一元論の分裂、生産したものとなる。反一元論として二元論が矛盾対立し、更に高次の一元論へ統一されて一元論は発展する。余りにも画一的な価値統一理論がそこにある。これは思惟の

自画自賛であり、観念論的解釈の何物でもない。思惟のみが存在から分離、孤立して自己生産を繰り返す理論は、思惟の存在に対する優越意識から思惟が存在を支配、征服する思想となる。思惟の自己生産を絶対的真理とするこの思惟弁証法は、存在そのもののへの配慮を忘れた人間中心的解釈であり、思惟の絶対的運動のために存在を曲解してはばからぬ危険思想となる。

存在とは人間の認識能力をもってしても理解し得ない深み、神秘性をもつものである。これを二元論で、まして一元論で解釈できるなど無謀な試みと云わなければならない。存在に即して観察するならば種差による対立も看取でき、多元的対立による闘争の場も再発見できる。そこには均衡、バランスによる調和が作用している。自然の場においては絶対的独立存在者はなく、常に他との共存において自己の保存が維持されている。人間の思考する矛盾対立の概念はそこには合致していない。人間すら自然の一員として他との共存において自己の生存を保持しなければならないのに、人間の思惟領域には人間の独立存在の意識しか存在していない。そこでは矛盾の概念が現実的ではなくなっている。

人間の思惟においては絶対否定の矛盾対立が他者否定の意識によって有効とされるが、これを存在へ移行、投視して宇宙普遍の真理とするのは思惟と存在を同一視する誤謬である。思惟と存在の峻別が思惟と存在を対等の立場に、むしろ存在の支配下に思惟を配慮するようにしなければ思惟本来の機能は完成しない。このためには価値の統一的

發展的解釈は思惟に属することを識別し、次に存在の一員である人間にとってこの解釈は妥当なものなのかの検討が必要となる。

人間だけが特別の存在ではない。人間のみの独立した繁榮、發展はあり得ない。人間は人間を中心とする世界の發展を考えているが、存在は人間の技術力を超越した神秘な力で人間を宿命的な回帰の中で弄んでいるのかも知れない。人間は自己の所業を進歩、發展と解釈して自己陶醉しているが、宇宙の時間からみて一瞬の存在である人間の行為は観音様の手のひらを往復したに過ぎない。それは發展ではなくて変化、相互移行かも知れない。人間には全く認識できないことである。

ここにおいて形式論理も弁証法も同一次元に立つことになる。弁証法といえども形式論理より優越した一つの特別な論理というものでもない。弁証法も一つの形式論理であり、この形式論理の基盤の上の一つの論理を主張することに変化はない。しかし形式論理の圏外に目を向けそこに非論理の領域を発見しこれを形式論理の枠内に導入する時、形式論理とは相違する一つの論理が必要になるのではないかということである。

この論理を従来の弁証法とは異種なものとして、これを弁証法ではないと非難する学者がある。<sup>(5)</sup>しかし矛盾対立のみを世界の実像と誤認し、これによる統一を發展と曲解するのが弁証法であるとするならば、弁証法本来の精神に反することになる。弁証法とは一つの現実的解釈であり、世界と歴史に即した理論である。現実から遊離した一つの思弁的世界を虚構する形式論理学の誤謬を、弁証法自身も犯してはなら

ない。

## 結

形式論理学に対する弁証法の存在意義は現実に即する存在論理にある。そこにある思想は思惟による存在の曲解、切り捨てでなく、存在尊重の精神である。ヘーゲル弁証法、マルクス弁証法の基本にある思想は、精神の發展、物の發展を価値的に重大視する人間尊重の精神である。人間中心主義となったヒューマニズムは無謀な存在支配を企て、存在の勝手な偽造、切り捨てを強行している。この存在再形成の基準が人間を中心とする遠近法的価値観にあることは云うまでもない。

この思想の源流をゼノン、ヘラクレイトスに窺うことができる。両者の共通する哲学的業績は存在に矛盾を発見することにある。飛んでいる矢は飛んでいないという矛盾を含んでいるのであり、矛盾するものは相互転化し合うのである。このような矛盾の指摘の相違によってゼノン、ヘラクレイトスの弁証法は、一方は主観的、他方は客観的と区別されるが、これらの思想の根底にあるのが思惟統一要求であることはこれ迄の論述で明確である。ヘラクレイトスはゼノンに比較すればより存在論的といえる。しかしヘラクレイトスの解釈にある二面性のために、一方はヘーゲル、他方はマルクスへと継承されていく。これもヘラクレイトスの理論に形式論理が前提されているからである。

現代弁証法は古代弁証法から何を学ぶべきかの問題が最後に残されている。弁証法といえども人間のための学問である以上、人間中心の

解釈から離脱できない宿命にあることは否定できない。この謙虚な反省に立って思惟弁証法から存在弁証法へ至る学問的努力は肯定されるべきである。この途は思惟一元論からの脱却である。一元論から二元論へ、更に多元論への過程は論理から非論理へ、矛盾否定から矛盾肯定への途となる。

矛盾対立において一方的排除は真の解決ではない。どちらも肯定しようとする矛盾肯定の意志が止場となり、これが両者を相互的に生かす弁証法的解決の契機となっている。しかし矛盾肯定という非論理を思弁的に否定して、これを高次元で統一しようとするのは思惟一元論である。これがために弁証法は単なる解釈に留まることができず、不当な存在改造を企図する革命思想へと発展する。

現代弁証法の歩むべき途は二元論的統一でなく、多元論的統一を目指すことにある。矛盾対立、統一と調和の概念もそこでは弛緩している。これは対立する両極を生かしながらその中間をも生かす思想である。しかしこれすら存在の神秘性から考えれば、未だ存在そのものに透徹する論理ではない。現代弁証法は弁証法の非論理性という学問の危険性を自らの中に包含しながら、存在の神秘を論理化する果てしない努力を続けねばならない。

## 註

パルメニデス、ゼノン、ヘラクレイトスに関する引用は、初期ギリシャ哲学者断片集 山本光雄訳編 岩波書店に拠っている。

(1) Michael Wolf, *Der Begriff des Widerspruchs*, S. 14 矛盾を表現する言語的形式のみでは、真の矛盾を現すに充分な基準となっていない。単なる形式的言語では表現できない矛盾の命題を求める試みが古代哲学にもあった。それは文の内容に関する矛盾であり、特別な説明を必要とするものである。

(2) ゼノンは運動に矛盾を認めているのであり、静止にはない。従って「矢は静止している」「矢は飛んでいる」の矛盾論証はゼノンにとって問題外である。

(3) Wolf, *DBdW*, S. 26ff.

アリストテレスの反論。運動と静止は時間の中で行なわれる。時間は決して時刻の点から構成されていない。それはいかに小さかろうとも時刻のへだたりをもち、そのへだたりは時刻の点によって満たされるものではない。成程、ある時刻の点において飛んでいる矢は動いていない。しかしそれはあらゆる時刻の点において静止していることにはならない。運動は時間を、それがいかに小さかろうとも必要とするからである。

## カントの反論

動く物体は空間の中を走り抜けるそれぞれの点において止まっているか、動いているか。答は動いている、である。動いているからこそそれぞれの点において矢は止まっている。(各点において止まっているのは動いている証拠。もし動いていなければ一点にしか存しないはずである。)

## ヘーゲルの反論

動くということはこの今ここにあり、あの今あそこにあるというのではなく、この今において同時にここにあり、ここにはないということである。矛盾が運動の中に示されるといふ古代弁証法の考えを是認することができる。しかしそのために運動が存しないということにはならない。運動



とは現存する矛盾そのものである。

(4) Wolf, DBW, S. 14ff.

形式論理学では矛盾概念を厳しく定義するが、その矛盾形式は言語形式であり、従って形式上求める矛盾と本来存する矛盾の間に存する関係など、形式論理学の研究対象から除外されている。そこで言語形式上、不一致な命題が、内容的には両者共に真であるとか偽であるかなどは、形式論理学の関与しないところである。

(5) 弁証法の問題 武市健人著 福村出版

四十三頁、矛盾が差異に引き下げられるとき、それはもはや弁証法ではないのではないか。

一〇八頁、イタリアの哲学者クローチェはその著書「ヘーゲルにおける生きたものと死んだもの」の中でいっている。ヘーゲルが論理の中に差異性を見出したのは「生きたもの」であり、矛盾が現実の論理であると現実を一面的に捉えたのは「死んだもの」であると。しかし真の現実が差異性につきるかどうか、この点が問題である。

(本学教授・倫理学)